

三つのなぜ

芥川龍之介

青空文庫

一 なぜファウストは悪魔に出会ったか？

ファウストは神に仕えていた。従って林檎りんごはこういう彼にはいつも「智慧ちえの果」それ自身だった。彼は林檎を見る度に地上楽園を思い出したり、アダムやイヴを思い出したりしていた。

しかし或雪上りの午後、ファウストは林檎を見ているうちに一枚の油画を思い出した。それはどこかの大伽藍だいがらんにあった、色彩の水々しい油画だった。従って林檎はこの時以来、彼には昔の「智慧の果」の外にも近代の「静物」に変わり出した。

ファウストは敬虔けいけんの念のためか、一度も林檎を食ったことはなかった。が或嵐はげの烈しい夜、ふと腹の減ったのを感じ、一つの林檎を焼いて食うことにした。林檎は又この時以来、彼には食物くいものにも変わり出した。従って彼は林檎を見る度に、モオゼの十戒を思い出したり、油の絵具の調合を考えたり、胃袋の鳴るのを感じたりしていた。

最後に或薄ら寒い朝、ファウストは林檎を見ているうちに突然林檎も商人には商品であることを発見した。現に又それは十二売れば、銀一枚になるのに違いなかった。林檎はも

ちろんこの時以来、彼には金銭にも変り出した。

或どんより曇った午後、ファウストはひとり薄暗い書齋に林檎のことを考えていた。林檎とは一体何であるか？——それは彼には昔のように手軽には解けない問題だった。彼は机に向ったまま、いつかこの謎^{なぞ}を口にしていた。

「林檎とは一体何であるか？」

すると、か細い黒犬が一匹、どこからか書齋へはいって来た。のみならずその犬は身震い^{たちま}をすると、忽ち一人の騎士に変わり、丁寧にファウストにお時宜^{しぎ}をした。——

なぜファウストは悪魔に出会ったか？——それは前に書いた通りである。しかし悪魔に出会ったことはファウストの悲劇の五幕目ではない。或寒さの厳しい夕、ファウストは騎士になった悪魔と一しよに林檎の問題を論じながら、人通りの多い街を歩いて行つた。すると痩せ細^やつた子供が一人、顔中涙に濡^ぬらしたまま貧しい母親の手をひっぱっていた。

「あの林檎を買っておくれよう！」

悪魔はちよつと足を休め、ファウストにこの子供を指し示した。

「あの林檎を御覧なさい。あれは拷問^{ごもん}の道具ですよ。」

ファウストの悲劇はこういう言葉にやつと五幕目の幕を挙げはじめたのである。

二 なぜソロモンはシバの女王とたった一度しか会わなかったか？

ソロモンは生涯にたった一度シバの女王に会っただけだった。それは何もシバの女王が遠い国にいたためではなかった。タルシシの船や、ヒラムの船は三年に一度金銀や象牙ぞうげや猿や孔雀くじやくを運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝らくだはエルサレムを囲んだ丘陵や沙漠さばくを一度もシバの国へ向ったことはなかった。

ソロモンはきょうも宮殿の奥にたった一人坐すわっていた。ソロモンの心は寂しかった。モアブ人、アンモ二人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃とうきさぎたちも彼の心を慰めなかった。彼は生涯に一度会ったシバの女王のことを考えていた。

シバの女王は美人ではなかった。のみならず彼よりも年をとっていた。しかし珍しい才女だった。ソロモンはかの女と問答をするたびに彼の心の飛躍するのを感じた。それはどういう魔術師と星占いの秘密を論じ合う時でも感じたことのない喜びだった。彼は二度でも三度でも、——或は一生の間でもあの威厳のあるシバの女王と話していたのに違いなかった。

けれどもソロモンは同時に又シバの女王を恐れていた。それはかの女に会っている間は彼の智慧ちえを失うからだった。少くとも彼の誇っていたものは彼の智慧かかの女の智慧か見分けのつかなくなるためだった。ソロモンはモアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人等の妃たちを蓄えていた。が、彼女等は何といつても彼の精神的奴隷だった。ソロモンは彼女等を愛撫あいぶする時でも、ひそかに彼女等を輕蔑けいべつしていた。しかしシバの女王だけは時には反つて彼自身を彼女の奴隷にしかねなかつた。

ソロモンは彼女の奴隷になることを恐れていたのに違ひなかつた。しかし又一面には喜んでいたのにも違ひなかつた。この矛盾はいつもソロモンには名状の出来ぬ苦痛だつた。彼は純金の獅子ししを立てた、大きい象牙の玉座の上に度々太い息を洩もらした。その息は又何かの拍子に一篇の抒情詩に変わることもあつた。

わが愛する者の男の子等の中にあるは

林の樹の中に林檎りんごのあるがごとし。

.....

その我上に翻したる旗は愛なりき。

請ふ、なんぢら乾葡萄ほしぶどうをもてわが力を補へ。

林檎をもて我に力をつけよ。

我は愛によりて疾^やみわづらふ。

或日の暮、ソロモンは宮殿の露台にのぼり、はるかに西の方を眺めやった。シバの女王の住んでいる国はもちろん見えないのに違いなかった。それは何かソロモンに安心に近い心もちを与えた。しかし又同時にその心もちは悲しみに近いものも与えたのだった。

すると突然幻は誰^{たれ}も見たことのない獣を一匹、入り日の光の中に現じ出した。獣は獅子に似て翼を^{ひろ}拡げ、頭を二つ^{そな}具えていた。しかもその頭の一つはシバの女王の頭であり、もう一つは彼自身の頭だった。頭は二つとも^か噛み合いながら、不思議にも涙を流していた。幻は暫く^{しばら}漂っていた後、大風の吹き渡る音と一しよに^{たちま}忽ち又空中へ消えてしまった。そのあとには唯^{ただ}かがやかしい、銀の鎖に似た雲が一行、斜めにたなびいているだけだった。そのソロモンは幻の消えた後もじつと露台に^{たたず}佇んでいた。幻の意味は明かだった。たといそれはソロモン以外の誰にもわからないものだったにもせよ。

エルサレムの夜も更けた後、まだ年の若いソロモンは大勢の妃たちや家来たちと一しよに葡萄の酒を飲み交していた。彼の用いる杯や皿はいずれも純金を用いたものだった。しかしソロモンはふだんのように笑ったり話したりする気はなかった。唯きようまで知らな

かった、妙に息苦しい感慨の漲みなぎつて来るのを感じただけだった。

サフランくれなゐの紅なるを咎とがむる勿なかれ。

桂けいし枝の匂へるを咎とがむる勿なかれ。

されど我は悲しいかな。

番紅花は余りに紅なり。

桂枝は余りに匂ひ高し。

ソロモンはこう歌いながら、大きいたてこと豎琴を掻かき鳴ならした。のみならず絶えず涙を流した。彼の歌は彼に似げない激越の調べを漲たらせていた。妃たちや家来たちはいずれも顔を見合せたりした。が、誰もソロモンにこの歌の意味を尋ねるものはなかった。ソロモンはやつと歌い終ると、王冠を頂いた頭を垂しぼちれ、暫くはじつと目を閉じていた。それから、――それから急に笑顔を挙げ、妃たちや家来たちとふだんのように話し出した。

タルシシの船やヒラムの船は三年に一度金銀や象牙や猿や孔雀を運んで来た。が、ソロモンの使者の駱駝はエルサレムを囲んだ丘陵や沙漠を一度もシバの国へ向ったことはなかった。

三 なぜロビンソンは猿を飼ったか？

なぜロビンソンは猿を飼ったか？ それは彼の目のあたりに彼のカリカチュアを見たか
ったからである。わたしはよく承知している。銃を抱いたロビンソンはぼろぼろのズボン
の膝をかかえながら、いつも猿を眺めてはもの凄^{すこ}い微笑を浮かべていた。鉛色の顔をしか
めたまま、憂鬱^{ゆううつ}に空を見上げた猿を。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第1巻」小学館

1987（昭和62）年5月1日初版第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第八巻」岩波書店

1978（昭和53）年3月22日発行

初出：「サンデー毎日 第六年第十五号」

1927（昭和2）年4月1日発行

入力：j.utyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日公開

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三つのなぜ

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>